隨感錄

本間文庫
文庫 14
A152

帝國圖書館藏

萩蕗

嵯峨の山人

かたみ

散てあく
命ゆも
こゝろりぬと
まさるよむ
捨てある
紙なれど

花一片の
造化のわ
思へば愛の

反古一枚の
友のまごころ

こゝろりぬと
まさるよひ
うつろはぬ
思ひてハ
恐れて
盛なる
慕ひてハ
恐れて
かりそめの
なき躰の

思ハ愛の
花の昨日を
亡女の身の
友の昔を
昨日の花の
かき捨ながら
形見となりし

友古一枚
なりふけるかも

涙の秋と

山蔭の翁（二）

山蔭の
浅沢いふ
枝びさし
葉はふ
うき我ふ
冷まさる

はふふの小家を
深世の嵯峨と
目ともるなり。
宮を元ケバ
ヒの思へとや
野寺の鐘

こう〳〵と
はら〳〵と
時雨かと
かゝるころも
なからへて
ふり注ぐ
敷妙の
あゝ深事を
すみもらる
語らひし

無常を語る。
落る木葉を
嵐か問ば
うつぬとかはる。
世をば思へば
涙の雨か
袖も朽ぬる。
語ふ語らん人
月か向て
友かと問ば

木枯の
鳴渡る
契かし
苦ひせる
あゝ寂命

鼻ゐと答ふ。
雁を呼びて
人いと問へば
塚の下といふ
一夢なりけり

大久保村の夕暮

夕日の西か傾けば
枯野を渡る風寒く
尾花を雪と散しけり

野辺の鐘いと寂て
里の夕をあとなへバ
鳥も森へ帰りけり

静ハ里の夕暮ぬ
彼方へ見ゆる小径をバ
村のをとめ歌ひつれ
家路とさして帰りゆく

自然ハ村の夕暮ぬ
彼方へ見ゆる岡の邊の
賤が家へ焚く煙

森をかすめて立昇る
此ふ哀は賤のをが
肌さへ寒きつゞれきて
家尊や家母の為へとて
森へ落葉を拾へなり
枯を拂ふ山風よ
心してふけ賤のをが
いろ〳〵衣の袖をバ
さなくも冷し身へしあれバ

さみだれの
月ふけて
その思ふ
みだれなる
山茅の
音さへて
ほとゝぎす
なきてわく

露を哀ひ(八)

晴間をまつの
ひとりくよ〳〵
恋ぞ心の
鏡も無常の
此も浮世哉
君をこひしと

朝貌の
露の玉
かさきかて
命かな
庭ふれはむる
池かゑぎどうな
かごと計る
ふれなば露の

述懐(七)

葉末ふ揺る
そよふく風を
けぬ間を頼む
わきなるよ
袂をば
葉末よふれ初
玉と散る

酒ハのめども
花ハ見れども
月ハ解けて
涙のそこの
憂世無常哉
人ハいはれず
世を春なから
庵ハねざめの
つゆとりて
はらふひまなき

心ハ酔いて
氣落ち
靄ハ散る
この思ひ
無常世憂世
我身ハ知らず
ひとりねの
涙苦労
軒の雫
なみだかな

いとふ浮世(三)

紅葉ちる夕の山ハ向ひてハ
何を歎ふ我心
ふり注ぐ暮山の雨ハ對してハ
何を歎うゝむ我心
思へバ神よ世ハ
何とて我を生みおけん
思へバ浮世とハ
浮める雲の世をやいふ
世を憂つ世ハ憂ゝ世つ

綾錦をふるさとの月
思ひどもまさ思ひども
昔の匠花由もなし
いざさらば名利の二ツ
捨てで入らん山の奥
うゐの風のふかぬ山蔭
真如の月をあとして

自髮分(三)

花の蔭ふ

数てゆく

ひが身の春を
うき世の秋の
あしさもふべの

消ゆきて
身をぞしひ
風さむし

山をも拔人
力も今ハ
樹をも打人
斧氣も今ハ

いにしへの
名とろうて
いにしへの
影もなし

世を秋風の

髮をふきて

黒髪の
恋故とえし
空しくとえて

闇の悪魔の
ねふべの夢を
苦や繋ぎ
心の海か

甲斐なきとのハ

雲とわはれべ
胸の火も
消ぬけり

わをみ車て
ねどろわせば
みざ此て
波をあぐ

老の身よ

昨日のうきを
今日の逃しみ
何を待とて

嗚呼薄命
人の身の事
一生を
月影の
何を悔て
いさ知ぬ

送りてハ
迎つゝ
世ハ住む

そをしも知らば
そをしも知らば
他ふくらして
知さむく今
身を恨む

初の所書

荒涼の曙 (四)

東雲の移り行くて
朝風の霧の晴れゆく

西白し西の星の冴ゆ
蓮枯れて風寒く
人踏絶えて荒白し

山あり杜平の遠山の
杉あり山顛の長代
鶺鴒飛り天空を舞ふ
大きな哉砂漠の曙
天高く地ひろし

帰郷

駒とめてふりさけ見れば、
月影さむく草野に落て、
霜を胚む霧白々と、
今来し里は何処ぞや、
千里のはてを見え分ぬ

草の根方に結ぶ露、
駒の蹄に掛けさせて、
明月を鞭をあぐれば、

雲間鶯老鶯移れと、
紅衣の袖よ花ぞ散る。

嬉しや故郷の山も見ぬ、
あの山のあなたよこそ、
あなたしのあさなさ時よ、
我の生れし村はあるなり。
我の音ちし乳はあるなり。

思へば六年のその昔、

我が門辺の桜の露
涙の露
送りまひし面影の、
今もあり。
我懐かし。
月の前の事

嬉しや今宵見えんとは、
神ならぬ仏の母上様の面もかくや
我ありと
思ひ出びつしなはれらん、
あなたしの母上よ。

月影と駒を駆て、
歸る山路の雲を踏バ、
森の木の間の月影ハ、
神奴脱奴、浴衣奴、
夜の猿猴の声悲し。

巖けはしき頂ふ、
歸を立て休ん一ば、
木枯さいとおとし来て、

ろハ木葉奴村雨奴、
駒のたてがみ梳る。

嬉しや我家の森を見ゆ、
いざや急人我駒よ。
鞭を揮て岨をくだれバ、
早くと来けり村時雨。
あれや菓葉の根元見ゆ。
土橋の水に照る月の、

影もさびしくのさむしろも、
氷る夜寒とおもふ天高く、
砧の音の木精をこハ、
誰が[illegible]、かゝる[illegible]うつなりよも
[illegible]。声は我[illegible]方からで
[illegible]

槙の板戸のびさせれて、
ふく風寒き伏屋の床、[illegible]を駆てゲ[illegible]門
見れバ
さし入る月[illegible]見る
一[illegible]。[illegible]の[illegible]を照させて
毋[illegible]多め[illegible]
鳴[illegible]
[illegible]毋上よ

脇も細き燈火の、
影ゝ砧の影を切く、
千蟲聲の声の中、
何を思ふ人。

老や花も[illegible]の、
常なき世のハかなさとて、
髪の香[illegible]て冴寒く、
昔の姿影もなし。
さりながら鳴呼さりながら、

哀一男し花の身となれ、
なほ地獄のなかるらん。

思へば六年のその昔、
櫻咲るし春の頃、
我子が遠き陸奥へ、
旅立てより世の間も、
高るく聞なく恋慕ふ、
母の思ひ人神も知る。

戦の場に先かけて、
今日へ命をなとしし、
悲しき便の聞えん迄、
又ハ神の加護深く、
明日ハ帰りて無事の其、
見せつ見らるる事ならん迄。
千々ふ砕くる老の身が、
思ひの海ちひまをなし。

去ら不思議門邊みて

鑓の音のやみしと、
東の間も忘るゝ間なき、
今も人思ひこがれし、
しや我子の帰りを待ける如く。
砧を戸を閉けば、
枕の風鬢を拂ひて、
月白く角みかゝる。

折しも丈夫の、
駒牽ぞ来る。

限りなき月影を、
照し見れば其人ハ、
あら嬉しや夢現。

月影の極者も其と、
のうせつかしの面上よ、
思ひハ千萬語ハ一句。
走れば敢をがる、
猛き心のまをよ、
情ある恩愛の、

涙や袖(そで)よしぐるゝ人。

軍営の秋の夜

鐘聞くごとに、霜白く軍営に満ち、月高く孔雀(くうじゃく)の屏風に入る。

雁(がん)行(こう)空に連れば、

夫婦山根に降て、

月清く夜静かなり。

一　偶感

田端の里に世を遁れて
寺の堂敷をわりの宿
塵ふけがれし我胸を
清き法の水もて洗がれば
鐘の音さへ身に染て
春の夕暮いと寂し

峯の梢を風ふけば
時雨かこるや夜の月
千々の物をば思はせて
歎のはるゝ間をなし
思へば世は乾坤の
かはり易きは人心
頼むまじきは現世の
此夢の間の生涯なり
功績成て名をあぐる
人さへあるゝ我はまた

十年の文章擲ちて
仕し去る一片の古反古
やがてはあの龍と葉られて
果は塵塚の塵とやなるらん
哀此侍を焚し古の
人の心よりも似るらばや
孤燈の下に見れば
昔も如る人の有り
不遇は古来文人の
常とし知れば歎くまじ

唯忍ばれぬい花の雪
我身実し軽くくられ

偶感

都を出て山里ふ
春を迎れば鶯の
声もやさしく花香ふ
風も長閑き昨日今日
我身の仁の樂しきを
悪魔妬しと思ひてや

豊嶋河の夕暮

秋風の林をもれしバ
散るハ落葉迎村雨
夕日てり添ふ豊嶋河
早ゆふぎりのかゝりけり.
かゝる冊帷をバ柴船の
白帆の影ふ載せて行ク白帆影
何処の里下迄かへるらん
渡塘ふ立て船呼べバ
水なれ棹とりのべて

渡守船漕寄れる秋の夕哉

[illegible]けき[illegible]

船ふ登りて[illegible]めけば何越もけば

村のてせ小桶をかしつて

棧橋ふ米を洗ふ

手元登らし夕靜れ

霞む[illegible]や柳桜[illegible]

見る人なきも恨かよんみなる

岸ふ登りて村道もけば

野寺の鐘鎖ととして

何を欲いさむ駅者の歌

ふしも哀ふ立きゆる

田き周のなまめくハ

無欲恨欲思ひ者欲。

燈火の影を小屋の影ル

絶えて人雪欲さびしさ欲

むらふるとの八一條の

うををのめける地道のみ。

古戦場

日落て雲遠く
月出て風蕭々
曾て三軍を西漢しとる
草花々とる古戦場
当年の武夫何処ぞある

鯨波山河をふるふて
砂烟天地を埋め
両軍の射る矢ハ粉んぐ

剣戟の電ひらめく
血烟の修羅の場
嗚呼生死何ぞ決せん
見よ血潮ハ草を染て
子弟幾万此地ハ倒れし骸
妻子幾万なき人を泣し骸

屍ハ朽て骨を埋め
刃ハ折て草を結ぶ
今将幾星を経さる

旅人杖をとめて昔を訪へば
月宿る蔭は
猿の泣きて旅愁誘ふ
風咽ぶ松の声は
鵲ハ鳴りて三軍切く
あくあはれ其古戦場

須磨の夕月
ふされバ波も静ふ
月も寄せくる須磨の浦

濱松風の声さびて
ゆふべの天は立昇る
そしはの烟いと遥か。

霞立つ淡路嶋
月の描る明石潟
影沈む明石潟
沖ふかき漁舟の
海士の呼声いと哀れ。

嗚呼須磨の浦、須磨の浦

此地皇子の戦場

思ひそ出る寿永の秋

源平両家の武夫が

武勇自慢の武夫が

興の発する日乾る

鎧の袖

月は朧に晩の星

風ふかせ鎧の袖

剣花を雲ふ秋風

此地みな花を争ひしを

打ちかせの

如何ぞ生死を争ひけん。

春の風、秋の雨

不来ふる幾百年ぞ

訪ねとして風は吟じる

松は向て昔を問ば

いはし人の影たそなけれ

月一輪鏡をかけて

景千里山河をてらす

嗚呼哀れ月の夜の古戦場須磨の浦

木曾の機嶋

山より山のかけ嶋を

有りのぼりゆく木曾の旅
雲より雲とふみまよふ
径ぞ危ふし其山岸際
をしあやまさバ千丈の
底ハ何処ぞ木曾の谿川
岩うつ波の東北きて
柿をさはし炊白波ハ
激津瀬のごと流れゆく、

山より山のかけ橋は
有りのぼりゆく木曾の旅
をしあやまさバ千丈の
かけ橋の命をかけひつる様と
よみしを既のかけ橋ハ
今ハ昔の影だになけれ
路傍に立て芭蕉の碑
彫し文字さへ苔むして
千歳の面影さすらし

かけ橋や命を[illegible]かよひ蔦蔓と

よみし雲路の桟橋ハ
今ハ昔の影だになけれ
巨人のふみし足跡ハ
到る所に痕をとゞめ
子孫追慕の種とやなるらん
路傍に立てる芭蕉の碑
彫し文字さへ苔むして
千歳の面影さすらし

箱根港湾大森濱の春の夕暮

但し箱飯春と雅ゝ風寒し

風寒き春の夕暮

大森の濱ふ出づれバ
荒波ハ磯ふ砕けて
百雷ハ天地をふるひ
白沫ハ雪をちらして
面をうつ霧ど冷やゝ

見よ雲を洗ふ波の上
沈々として月沈み

波をおかふ雲の上
團々として月昇る
北海の大パノラマ

一鳥あり其翼白し
死去て雲ふ入り
死来て波上を舞へバ
月を洗ふ波高く
月を吐く雲黒く
くゝ波の間ふかゝる

月影ハ陰々として
蒼白の光冷やかなり
雲をてらせバ霜[illegible]
波ふうつれバ影寒し

鳴呼臥牛山頭雲うづまくハ
雨のかゝる歟月の夜
碧血碑辺松[illegible]
旅魂咽ぶ歟[illegible]の夜
春[illegible]吟じるハ

若し[illegible]山頭に北を望めバ
平ヶ漠々人影見[illegible]
江山遠く[illegible]
胡砂獵々酒[illegible]

唱呼也陸郭[illegible]
沈ハ尺鉄[illegible]沈ふて金鐸せく
唯見る[illegible]人の馬を牧かて
月影ふかへり也くを

軍営の秋の夜

鋒とりて顧望をれば
霜白く軍営小満ちて
天高く風寒し

雁数行空をつぐれば
声悲しく山坂に落て
月清く夜静なり

越の山、能登の景
今ぞ合せて我領とせんも
面白し男児の業

さもあらばあれ今雪の日み
老花の人を思ふ人
ふる郷人のかわるへば

九十 漁翁

利根川の春景

しろがねとなりし石勝かうの
利根の河辺にみなれ棹
とりて舟やれば
衣の袖をぬらすなり

嵯峨のや主人

山年の柳をけもり籠む

さん月を ふとこころの
ぬき抱きてそ 船の底
梶を枕ゐ 片敷バ
ふなば ゆく 波の音すみ
墓の草日の風楽し

嗚呼世人何を知る 何
古今の興亡盛衰 哀歌

浮世の浮沈栄枯の影
見よや頭をめぐらせバ
英雄傑士も皆失せて
残るハ山河の眺のみ。

やめよ人事ハ齷齪たるを
若し笑て自然の陰
山と水とハ狂浪し
月ハ向て高吟せん。

冬の夜の野道（ブロレキンの詩を譯す）

天ふかみざつ夕霧を
照れ出る月の寒ひけくも
野ぶ氷る雪の上
しろじろ落る影哀れ。

冬の野道

さびしき冬の野道をば
勢猛ふ馬車かれば
とぼちの里よ木精れる
鈴の音さへて夜ハ靜か。

畑の細道

雲ふき畑の畑道
月出て荷ふて影ふみゆけば
野寺の鐘霧ふ竹籠りて
いさゝ川流靜けく
まばろしの夢山地ふ登つ

冬地の夕暮

雪白き冬の夕暮
風寒き野末をゆけば
ふ月の影も氷りて

白々と肩みかいこ

流が忘れし鎌で草刈
日の影寒氣よ光さを
風そよぐ苔の蔭
石地蔵さびし氣れ立つ

あゝあはれ、夕靜の波路よ
まばろしの夢ゆ靜か
家々の戸をば閉きつ

水の流に従ひて
ひとり靜かに小舟をわけぬ
水景は水の面にとり
豊嶋の宝寺嶋尾久の村、
稲田の水の影清くさゝ清みて
苗代の田の稲青し
見よ世に辛苦の宝
厠に住む農夫の汗の一滴
こぼれ落ちみのりし此稲を
何村の見物馬に乗りて、鳥居の蔭とかけゆくハ

世の敵は何処ぞ世鯨波

あはれ一老夫の門口に立て

空しく枯れ出でし昔

孫のあそびを見

朝の漫歩

朝日の天に輝けば

草木の露の濃やかに

面を拂ふ風涼し

玉ゆらびく楼閣

色ゑ生徒の煙ぞやし

民の竈のなぎやかみ

鶏鳴犬吠の村

賊のとのこの駒

畑をさして出でぬく

小竹世露けき山蔭の

道をひとりしたけわけば

草叢かげに蟋蟀

道わく人と服せり

在明西に傾かんとして

美人[illegible]院後の丘ばれて
鐘堂の森の梟かもむ
長閑けき春の朝かな

[illegible]
時雨[illegible]
雪[illegible]

雪の[illegible]
[illegible]朝の春
時雨けり庭の松ぬれけむりけり

一輪つめばはるとと
袖かこぼれてはるる

冬の夜の野道（西洋の詩を譯し）
天の波ざつメ霧かを
洩れ出る月の寒けくも
野末の氷る雪の上
しろ〳〵落る影哀れ

さびしきそのの野道をバ

勢猛ふ馬車かれバ
とはちの里ふ木精をる
鈴の音さへて夜ハ静か
何を欲いくむ駅者の歌
ふしも哀ふ流るる
田き鳴のなめくハ
悲郎、恨郎、思ひ者郎
燈火の影もふ花の影も

絶てハ雪欲さびしさ欲り
むらふるものハ一俤の
うををのける野道のみ

木曾の桟橋

山より山の桟道を
ありのぼりもく木曾の猿
雲より雲を迷ふかな
懸橋や命をかふむつさ桂と
よみしも跡のかけ橋も

今ハ昔の影となれ
路傍に立てる芭蕉の碑
彫し文字も苔むして
千歳の雨にさらさるく

須磨の夕月

ものふさればなみも静かに
月を寄せくる須磨の浦
濱松風の声さびて
ものふべの天に立昇る

そしほの煙いと遥か

霞に深ぶ淡路嶋
月の描る明石潟
影沈、脱沈、霞そ
中に小さき漁舟
海士の呼声いと哀れ

嗚呼須磨の浦須磨の浦
汝こそ知るらめその昔

源平両家の武夫が
月かぶんや兜の星
潮ふ[illegible]や鎧の袖
剣花を霜ふ散しつゝ
此処ふ生死を争ひしも

春の風秋の雨
朱ふる幾百星
現そとして風ふ吟じる
松ふ向て昔を問へば

いふし人の影こそなけれ
月一輪鏡をかけて
暮千里山河とてん
嗚呼哀れ月の夜の須磨の浦

北海大森濱の夕暮
風寒き春の夕暮
大森の濱ふ出づれバ
荒波へ磯ふ砕て
百雷ハ天地をふるひ

白沫ハ雪を散して
面をうつ霧ぞ冷やか
見よ雲を洗ふ波の上
沈々として月沈み
波をわけふ雲の上
圓々として月昇る
北海の大パノラマ

一鳥あり其翼白し
飛去て雲に入り

飛来て波上を舞ハ
月を洗ふ波高く
月を吐く雲黒く
雲波の間にかくる
月影ハ陰々として
蒼白の光冷やかに
雲をとよせバ霧まよひ
波にうつれバ影寒し

嗚呼臥牛山頭雲うづまくハ

和のかしら炊月の夜
碧血碑辺松の響くハ
英魂咽ぶ炊春の夜
暮し山頭の北を望めバ
千里の平沙月打ちて
霧のくれなゐ山遠く
朧ふ霞む竜磯を
胡人笛を吹ひつゝ
馬を牧ふて帰りなく

賤が伏屋の夕煙
森をかもめてさち昇る
秋の暮

二　山里の春の曙
身ふりかゝる世の塵を
避てかくるゝ山里の
在明をゞし春の曙
庭ふ来てなく鶯の
声もやさしや宮の梅

一輪つめバはる
袖よこぼれて風香る

二　春の山里

鶯とハいへど春くれバ
垣根の小草萠出て
軒端の梅の匂ふなり
野ハ蒲公英蓮華草
もみれの花の咲出て
蝶ハ花の花ゝ狂ふなり
雪晴の曙

初夏の漫歩

日影の西ハ傾けバ
木々の緑と減て吹く
夕暮さびし風の音

水の流ハ遥ひて
ひとり静ハ小径をあゆ
木影ハ水の面ゝとり

豊嶋の里、尾久村

稲田ふ水の影清て
苗代小田の稲青し

見よ浮世こそ幸苦の里
農夫の汗の一滴
落てみのりし此稲を
何ぞ村の児竹馬ふ乗て
鳥居の蔭をかけめくハ
汐の蔵何処迄鯨波

哀れ老夫の門辺ふ立ちて
空しく柳させし昔為ふ思
孫の遊びを見惚てぞ居る

豊嶋河の夕暮

秋風の林をかけれバ
数ろハ落葉炊村雨沢

夕日てり添ふ豊嶋河
早夕霧のわくりけり

かゝる霧をバ柴船の
載て分ぬく白帆哉
何処の里みやゐわるらむ

渡場ふ立て船呼べバ
水かれ揮とりのべて
渡守船こぎ寄しる

静けき秋の夕わな

船ふ登りて河越もけバ
村のこゝかゝ桶をわ
棧橋ふ米を送ふ

手元愛らし夕霧ふ
深霞むや姉様被り
見る人せきで恨みなる

岸ふ登りて小道をけバ
野寺の鐘鐘さとして
賤が伏屋の夕煙
森をわけて立昇る

畑の細道

霜白き畑の細道
月を荷ふて影ふみもしけバ
野寺の鐘霧ふけ籠りて
いさ川流れ絶けく

加藤肥後

無常の燈火ハ
消ゆるとも
月ふ影あり
常住の
義氣ハ消ぬ
天地の間。
さとり其身ハ
死ぬるとも

名こそおしけれ
弓取の
忠義ハ打じ
とこしへふ。

傾く運の
大坂の
世の有様を
見るよ附け
加藤肥後が

無念の涙
神こそ知らめ
戰々と
鎧の袖よ
ふりかこう。
心を語る
ものとなし。

嗚呼
天下を縦横して

四海の乱を
一掃し、
我君の
大坂城、
昔の栄ハ
何処ぞある。
いでやいで
今日こそハ
幼君の為め
あの古狸を。

二條
[illegible]城中
雲ふかく
懐中のピヤ
鳴て錦と。
暁と暁
[illegible]
[illegible]
諸[illegible]
見「[illegible]」刹那。
一言で、

命の瀬戸。
剣花を散し
鞘を出でざれば、
哀れ
老枝の血ハ
騒府の二城を染め
城中皆かさん。
帰来ヒ千、
懐を賞りて、
泣ていふ
鬼将軍

今日めしく
先君ノ報ゆ。
義気凛々
鬼神を動し
英名千年
青史を照れり。

一言坂
機山の用兵
天下敵せし。

孤城寂松
落日かゝる。
大軍野に満つ
甲州勢。
駿遠兵あり
僅に六千。
あやまりて内乱
重囲に落つ。
其後丈夫あり
平八郎。

匹馬単槍
趨き救ふ。
従ふ兵士
僅に五百、
叱咤していふ
死ね！
金鼓鳴て
敵軍起り。
旋ハ動いて
鯨波あがる。

勇将の下
弱兵なし。
虎音耳を聾きて
重鎧鳴り。
意氣ハ揚りて、
神牛を突く。
折れいし
君恩今日報ん、
猛然直進
敵軍を御く。

一言坂の山顛
砂烟起りて、
忠勝先鋒
士氣益盛ん。
麻の角の兜
卯の花の絨。
日光輝て
人目眩ゆし。
鉄槍手にあり
晴天切。

鞭下駒立り
嵐影。
一声天を向て
雲を吟び、
鉄蹄躁躙れ
甲冑勢。
鞍上の平八
武勇絶倫。
鉄槍一さびあがりて
敵軍せかき、

落花片々
馬前に飛る
地に埋れ
濤松に吹る
甲冑の勢
歌て曰く
家業の
二つあり
唐の音
本多平八

兵謀河中嶋

胸中不識菴

神算あり

肅々

夜河を渡り

曉

大霧を猥して進む

機山帶留軍
見ル此ど
四ち後隊を
前隊となし
来り迎ひ
不識菴の兵
見よ
軍氣の
未だ回せざるを

殺氣天を衝く
八幡林
突喊潮ハ湧く
河中嶋
甲越の両軍
兵法盡んば。
勝敗未だ決せず
殺衝当る。
血ハ野草を染て

手すさびとして
紅黄り、
屏風ハ 犀川ハ 無 落て
紅波 飜る。

謙信 元是
血性漢、
大剣長戈
鞘を出て 鳴り。
法象月毛
雲を踏人で 乱ぶ。

呼人でい山
瑠璃 何処 ゆ あ る。
花袍銀鎧
旭日 輝き、
巌下 電
双眼 怒る。

信玄 斧を 離れて
犀川 ゆ 進ム、
犀川 ハ 高ふして

馬腹を洗ひ
両將奮戰
白沫乳と飛ぶ。
嗚呼千古の新觀
千古の遺憾
蒼太陽
彼何者ぞ
流星光芒
長蛇と逸し。

八幡公
奥羽六軍
王化に浴せば
集帥軍を模みて
反旗を懸く。
深乱由あり
八幡公。
六軍堂に
往て賊を討つ。
朔風面を吹て

霜花冷やかなり、
邊月弓をかけて
秋草寒し。
胡馬朝に嘶く
衣河の関。
胡笳夕に哭く
高館の城。
賊軍一日
雪を侵して来る
関東の男児

神謄あり
奮闘血戦
雪紛々、
終ふ賊巣を空りて
集帥を降れ。

義家即ち
王帥を迎へ
帰来駒を止む
何来の関

勿来の関頭
櫻花燦爛
将軍駒を止めて
櫻花を望めば
花は紛々として
金鎧を掩ふ

将軍即ち
歌ていはく
ふく風を

勿来の関と
思へども
みちをせかるる
山桜かな

其文其武
天下の佳話
後世の児孫
英風を想ふ

曙の東山　京美人

霞たなびく春の頃
流れも清き鴨河の
水で洗ひし羽二重の
肌も清しき京美人
四條の町をとどりもく

残の雪の膚とけて
梅が香うはる顔の艶

さとひ涙の目ふかゐる
眉のまはひの目くるる
面をもかなしむ梨花一枝
髪のはつれを濡か露そ

ふべの只古のもすばれて
今朝を思ひの種となる
情や男と恨めどる男のうらごゝろと
裏ハ所愛の恋の癖
憂そやる瀬のなうるらん

ぬを見負して祇園の茶屋
後を慕へば四條町
往き来るさのみこみみ
へどとられ消つれど
影隠る印象の
記憶
其面影を忘れぬ者の名

傾城

露と呼べば命と答ふ
出こそ哀れくさもとの
なくより外ふ心なし
傾城と呼べばあいと答ふ
身こそ悲しき姫龍の鳥
つゝや如在と
泣て送りし源氏の

客と朝の鐘と別れ
夕の月と平旗の
人を笑ふて迦ふる身と
昔よりして浮名を流す
此川竹は八月も照らぬ夜
初の花客はまだ氣も知れず
如何して機嫌をとるべき夜と
手管を碎くも眞深や
若しとりかよつてと寄り添へば
釋なお客のあれ恥しい

若し斯いふてハ笑をれんと
心わくれて物言をれず
後と先とふ氣の迷ふ
馴染の■客の無理口舌
そんな丈称なれハ知りんせ
問ふて見やんせ窓の月
とをまして見てもどうしても
心はまゝ濁江の
夜毎ゝ■客の数
假令絹布の夜具ゝねるとも

枕そ知よ人我涙
あれ聞しゆんせ
かむろこさんの口癖の
よくつてようも耳馴れし
孫覚の床ゑ目ふけて
つらや悲しや夜半の鏡

藝者

[illegible]

何故寝ると浮名をハ呼ぶ
假令形こそきやしゆんハ見ゆれ
腕の力ハ英雄を弄ぶ
湯帰ゑ素顔
いゝ人を驚かし
吹敷屏の左襖
愛敬を溢す
ゆふしごげんの三下り
大津絵ぶりのとつちりとん
何ぞ其調の陰氣なりや

見よ

昔ハ六波羅の銀の春よ
舞衣の袖を亂つし
牡鹿なく嵯峨の、秋み
浮世の無常を悟りしもあるみ
今ハ空しく客の席上
鄙声を放ちて紙幣を乞れとハ
假令三絃夜月ゝ彈じるも
如何よせん
男みをつる誠のなきを

此情なしなしの
酒瓶の猫め
田楽焼と称して
手をやく同れ

哄！

双義

風鈴の音色ゆかしき出雲子み
置盃べらる植木鉢
葉影の緑色涼し

窓よりされ蛍火と
こぼすや露の片靨
おや[redacted]みいちゃんと呼べどふり返り
おや[redacted]ちゃんと立どまる
目元のしほよりんとしき
東育のはりも見ぬ

何処へ
[redacted]おぶろへ。
おめかし粧。
あら[redacted]おくつてよ[redacted]母様ハ

[redacted]。帰りはお寄りな有難く
あ[redacted]めき過ぎる

声の、その後影
見送りながら蛍火と
何を笑ふぞ白歯の娘
鬢のほつれをかき[illegible]
情らしさのその振りよ
人の心やなや[redacted]らん

あとやさき

ちる花を
袖にうけとめれど掬へば流る
顔ふぬられし此どころを
光りとどまれぬ此遺恨
腰の刀へ達ふハさくぬと
啼くや鳥月の時鳥
ふりくる雨もいとひなく
日本堤の闇の夜
待ていとかけし一声ふ
宵を乱ふかや電の
剣の光あちら光

剣の光

待つ恋

今宵こそと言ひしをも
まつよ来ぬとハ胴慾な
月も更ゆく国の中
女心つくよ〳〵と
遊しつれなし獨床の
床上床覚の夏思ひ

遇ふ恋

可愛やと占て保し
其一言が命みて
そつと身みしむ嬉しさの
日の夜床の秘詠
驚山の昔しのばるる
その下紐のほどけしを

後朝の恋

あゝ如契る短夜の
明るハいやよ山の端よ
しろ〳〵妙る其指先
とゝきあ〳〵の別れかいな
あれ鶏草葉の鏡の声
其れ今少しと袖とめて

怨む恋

高ゝ子し此身と知らば
撥ひてし、人の恋しさ
なつかしさ、文ハやれども

過しなし、いつて命も
消へよとて、つきぬ恨を
法昭ん、　為ハ姿しと
ものわいな。

何時事をハ考むかひをなさ山なれと
世ふ何ろよ見さきはのまされと